# 第31回夏期福音特別集会（2）（伊東）
# 橄欖と燈台　婦女と赤龍
## ――ヨハネ黙示録第11～13章――

１９８４年７月21日
小池辰雄

二人の証人　底なき所より上る獣　勝利の声日を著たる女　赤き龍　海より上る獣　羔羊の生命の書　「六百六十六」　火も亦涼し

【ヨハネ黙示録11】

1ここに、われ杖のごとき間竿を与えられたり、斯て或者いう『立ちて神の聖所と香壇と其処に拝する者どもとを度れ、2聖所の外の庭は差措きて度るな、これは異邦人に委ねられたり、彼らは四十二个月のあいだ聖なる都を蹂躙らん。3我わが二人の証人に権を与えん、彼らは荒布を著て千二百六十日のあいだ預言すべし。4彼らは地の主の御前に立てる二つのオリブの樹、二つの燈台なり。5もし彼らを害わんとする者あらば、火のその口より出でてその敵を焚き尽さん。もし彼らを害わんとする者あらば、必ず斯のごとく殺さるべし。6彼らは預言するあいだ雨を降らせぬように天を閉ずる権力あり、また水を血に変らせ、思うままに幾度にても諸種の苦難をもて地を撃つ権力あり。7彼等がその証を終えんとき底なき所より上る獣ありて之と戦闘をなし、勝ちて之を殺さん。8その屍体は大いなる都の巷に遺らん。この都を譬えてソドムと云い、エジプトと云う、即ち彼らの主もまた十字架に釘けられ給いし所なり。9もろもろの民・族・国語・国のもの、三日半の間その屍体を見、かつ其の屍体を墓に葬ることを許さざるべし。10地に住む者どもは彼らに就きて喜び楽しみ互に礼物を贈らん、此の二人の預言者は地に住む者を苦しめたればなり』11三日半ののち生命の息、神より出でて彼らに入り、かれら足にて起ちたれば、之を見るもの大いに懼れたり。12天より大いなる声して『ここに昇れ』と言うを彼ら聞きたれば、雲に乗りて天に昇れり、その敵も之を見たり。13このとき大いなる地震ありて都の十分の一は倒れ、地震のために死にしもの七千人にして、遺れる者は懼をいだき、天の神に栄光を帰したり。

14第二の禍害すぎ去れり、視よ、第三の禍害すみやかに来るなり。

15第七の御使ラッパを吹きしに、天に数多の大いなる声ありて『この世の

国は我らの主および其のキリストの国となれり。彼は世々限りなく王たらん』と言う。16かくて神の前にて座位に坐する二十四人の長老ひれふし神を拝して言う、17『今いまし昔います主たる全能の神よ、なんじの大いなる能力を執りて王と成り給いしことを感謝す。18諸国の民、怒りを懐けり、なんじの怒りも亦いたれり、死にたる者を審き、なんじの僕なる預言者および聖徒、また小なるも大いなるも汝の名を畏るる者に報賞をあたえ、地を亡す者を亡したもう時いたれり』19斯て天にある神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の櫃見え、数多の電光と声と雷霆と、また地震と大いなる雹ありき。

## 【ヨハネ黙示録12】

1また天に大いなる徴見えたり、日を著たる女ありて其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕あり。2かれは孕りおりしが、子を産まんとして産の苦痛と悩みとのために叫べり。3また天に他の徴見えたり。視よ、大いなる赤き龍あり、これに七つの頭と十の角とありて頭には七つの冠冕あり。4その尾は天の星の三分の一を引きて之を地に落せり。龍は子を産まんとする女の前に立ち、産むを待ちて其の子を食い尽さんと構えたり。5女は男子を産めり、この子は鉄の杖をもて諸種の国人を治めん。かれは神の許に、その御座の下に挙げられたり。6女は荒野に逃げゆけり、彼処に千二百六十日の間かれが養わるる為に神の備え給える所あり。

7斯て天に戦争おこれり、ミカエル及びその使たち龍とたたかう。龍もその使たちも之と戦いしが、8勝つこと能わず、天には、はや其の居る所なかりき。9かの大いなる龍、すなわち悪魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる全世界をまどわす古き蛇は落とされ、地に落とされ、その使たちも共に落とされたり。10我また天に大いなる声ありて『われらの神の救いと能力と国と神のキリストの権威とは、今すでに来れり。我らの兄弟を訴え、夜昼われらの神の前に訴うるもの落されたり。11而して兄弟たちは羔羊の血と己が証の言とによりて勝ち、死に至るまで己が生命を惜しまざりき。12この故に天および天に住める者よ、よろこべ、地と海とは禍害なるかな、悪魔おのが時の暫時なるを知り、大いなる憤恚を懐きて汝等のもとに下りたればなり』と云うを聞けり。

13斯て龍はおのが地に落とされしを見て男子を生みし女を責めたりしが、14女は荒野なる己が処に飛ぶために大いなる鷲の両つの翼を与えられたれば、其処にいたり、一年、二年、また半年のあいだ蛇のまえを離れて養われたり。15蛇はその口より水を川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたれど、16地は女を助け、その口を開きて龍の口より吐きたる川を呑み尽せり。17龍は

女を怒りてその裔の残れるもの、即ち神の誡命を守り、イエスの証を有てる者に戦闘を挑まんとて出でゆき、18海辺の砂の上に立てり。

【ヨハネ黙示録13】

1我また一つの獣の海より上るを見たり。之に十の角と七つの頭あり、その角に十の冠冕あり、頭の上には神を瀆す名あり。2わが見し獣は豹に似て、その足は熊のごとく、その口は獅子の口のごとし。龍は、これに己が能力と己が座位と大いなる権威とを与えたり。3我その頭の一つ傷つけられて死ぬばかりなるを見しが、その死ぬべき傷いやされたれば、全地の者これを怪しみて獣に従えり。4また龍おのが権威を獣に与えしによりて彼ら龍を拝し、且その獣を拝して言う『たれか此の獣に等しき者あらん、誰か之と戦うことを得ん』5獣また大言と瀆言とを語る口を与えられ、四十二个月のあいだ働く権威を与えらる、6彼は口をひらきて神を瀆し、又その御名とその幕屋すなわち天に住む者どもとを瀆し、7また聖徒に戦闘を挑みて、之に勝つことを許され、且もろもろの族・民・国語・国を掌どる権威を与えらる。8凡て地に住む者にて其の名を、屠られ給いし羔羊の生命の書に、世の創より記されざる者は、これを拝せん。9人もし耳あらば聴くべし。10虜にせらるべき者は虜にせられん、剣にて殺す者は、おのれも剣にて殺さるべし、聖徒たちの忍耐と信仰とは茲にあり。

11我また他の獣の地より上るを見たり。これに羔羊のごとき角二つありて龍のごとくに語り、12先の獣の凡ての権威を彼の前にて行い、地と地に住む者とをして死ぬべき傷の医されたる先の獣を拝せしむ。13また大いなる徴をおこない、人々の前にて火を天より地に降らせ、14かの獣の前にて行うことを許されし徴をもて地に住む者どもを惑し、剣にうたれてなお生ける獣の像を造ることを地に住む者どもに命じたり。15而してその獣の像に息を与えて物言わしめ、且その獣の像を拝せぬ者をことごとく殺さしむる事を許され、16また凡ての人をして、大小・貧富・自主・奴隷の別なく、或はその右の手、あるいは其の額に徽章を受けしむ。17この徽章を有たぬ凡ての者に売買することを得ざらしめたり。その徽章は獣の名、もしくは其の名の数字なり。18智慧は茲にあり、心ある者は獣の数字を算えよ。獣の数字は人の数字にして、その数字は六百六十六なり。

## ●二人の証人

ヨハネ黙示録第11章～13章に入ります。なかなかやっかいな所です。黙示録第11章。

1ここに、われ杖のごとき間竿を与えられたり、斯て或者いう『立ちて神

**の聖所と香壇と其処に拝する者どもとを度れ、2聖所の外の庭は差措きて度るな、これは異邦人に委ねられたり、彼らは四十二个月のあいだ聖なる都を蹂躙らん。**

黙示録の筆者であるヨハネが、この時は見ているのではなくて、今度は計らなくてはいかん。行動に移る。使徒ヨハネも預言者のように、もちろん使徒もそうですが、言葉ばかりでなくて行為の方に移っていく。預言者イザヤもエレミヤもそうでした。ホセアなんかも始めから行為した。

要するに、言葉と行為というのは実は別ではない。本体に神の声がかかると、それは口に発すれば言葉となるし、手足に発すれば行為になるだけのはなしで、別々ではない。表現の仕方が違うだけで、同じなんです。言葉も、もちろん力を持っている。行為も力を持っている。

聖書はもの凄い響きである。単なる理解程度の意味ではない。劇でいうと、アクターになるわけです。聖書はドラマですから、教えの書ではない。シェークスピアの素晴らしいドラマもこの聖書一巻というドラマにはかなわない。みな、聖書を何かもったいぶっていますけれども、これは大変なドラマです。

**「間竿を与えられた」**

というのは、既にエゼキエル書40章に出ている。これは長いヨシかアシの茎であるらしい。「香壇」というのは燔祭の壇です。要するにこれはエルサレムの神殿です。神殿を計るということは、これは神さまの手先になっているので、自分で計ることはできない。神殿にあって携わる人は祭司ですから、この場合、祭司的な立場に立たせられているわけです。

「度る」という言葉は長さを計るという言葉ですけれども、その内容を究める、黒白を明らかにする意味です。ところが、

**「聖所の外の庭は差措きて度るな」**

と、これは「都が踏みにじられる」からと。だから、聖所エルサレムの神殿と都とは非常な、白と黒のような、光と闇というような情況にあるということが暗示されているわけです。

**3我わが二人の証人に権を与えん、彼らは荒布を著て千二百六十日のあいだ預言すべし。**

「千二百六十日」と「四十二ヶ月」というのは同じことで、これは三年六ヶ月ということです。「二人の証人」というと、キリストは変貌の山で旧約の驚くべき証人、モーセとエリヤに遇われました。この場合の「二人の証人」というのも、暗にモーセとエリヤが思われているらしい。「荒布」というのは、神の前に平伏して悔改めのときに着るような衣です。預言者や祭司のそのような平伏しの気持が、この「荒布を著て」ということです。

**4彼らは地の主の御前に立てる二つのオリブの樹、二つの燈台なり。**

証人がまたオリーブの樹であり、燈台であるという。オリーブはゼカリヤ書に特に出てま

すけれども、イスラエルにおいては非常に大事な樹です。「燈台」というのはメノラーのことで、七つの燈火がある。これはオリーブの油です。それから、香油にもなる。食用にもなる。オリーブの樹は今でもイスラエルにはたくさんあります。

5 **もし彼らを害(そこな)わんとする者あらば、火のその口より出でてその敵を焚(や)き尽さん。もし彼らを害わんとする者あらば、必ず斯のごとく殺さるべし。**

ですから、この二つのオリーブ、二つの燈台、二人の証人、そういう選びの器は天的な啓示をそこにはっきりと現す象徴として言われているわけです。これに逆らうと、火が出て、みなこれを焼きつくしてしまう。特にゼカリヤ書4章あたりをごらんになるといい。

6 **彼らは預言するあいだ雨を降らせぬように天を閉ずる権力(ちから)あり、**

この言葉からすぐ思い出すのは、エリヤです。エリヤの祈りによって、雨が降ったり止んだりする。エリヤのことは列王記略上の17章以下にあります。

**また水を血に変らせ、思うままに幾度にても諸種(もろもろ)の苦難をもて地を撃つ権力あり。**

この事態は出エジプト記の7章に出てます。みな関連してます。

## ●底なき所より上る獣

7 **彼等がその証を終えんとき底なき所より上る獣ありて之と戦闘(たたかい)をなし、勝ちて之を殺さん。**

もちろん「底なき所より上る獣」というのはサタンのことです。この「二人の証人」というのをただモーセとエリヤに限る必要はないけれども、証者というものは二人要するということは、旧約にちゃんと出ていることで、そういうところから来ている。オリーブも左右にあり、燈台も左右に置かれるわけですから、そういう意味で二つということです。

8 **その屍体(しかばね)は大いなる都の巷(ちまた)に遺(のこ)らん。この都を譬(たと)えてソドムと云い、エジプトと云う、即ち彼らの主もまた十字架に釘(つ)けられ給いし所なり。**

この「ソドム、エジプト」という言葉はもちろん比喩的に言っている。ソドムは非常に乱れた都でした。今のエルサレムとローマがそうだというわけです。「ソドム、エジプト」という言い方で、「エルサレムとローマ」ということを暗に示している。もちろん、キリストが十字架につけられたのはエルサレムの城外でありますけれども。

9 **もろもろの民・族・国語・国のもの、三日半の間**

2、3節は「三年半」でしたが、今度は「三日半」ですね。

**その屍体を見、かつ其の屍体を墓に葬ることを許さざるべし。**

非常に恐ろしいことです。野晒しにされてしまう。これは葬られないのですから、非常な侮辱なわけです。鳥やハゲタカなんかが来てついばむことになる。

10 **地に住む者どもは彼らに就きて喜び楽しみ互に礼物(れいもつ)を贈らん、此の二人の**

**預言者は地に住む者を苦しめたればなり』**

「地に住む者」とはサタンの子らです。

11 **三日半ののち生命の息、神より出でて彼らに入り、かれら足にて起ちたれば、之を見るもの大いに懼れたり。**

屍の方は殉教の人たちのことです。

12 **天より大いなる声して『ここに昇れ』と言うを彼ら聞きたれば、雲に乗りて天に昇れり、その敵も之を見たり。**

この11、12節は非常に大事なところです。「生命の息が神より出でて」という言葉は、創世記2章の

**「神が土から人を造って生命の息を吹き入れたら、人は生けるものになった」**

というのを思い出すような所です。

**「かれら足にて起ちたれば」**

という所は、即ち屍が立ち上がるというのは、エゼキエル書37章の枯骨の復活のところを思いおこすようなところです。だから、サタンは勝ったと思って大いに喜んでも、どっこいということです。殉道者たちがいかに惨憺たる死に方をしても、それは必ず神さまが驚くべき復活と勝利を与える。そのことを本当に信じて行った初代殉道者たち、また日本でもカトリックの最初の人たちはみなそういうことです。笑って木に架かっていったような人もあるわけですから、大変なことです。

13 **このとき大いなる地震ありて都の十分の一は倒れ、地震のために死にしもの七千人にして、遺れる者は懼をいだき、天の神に栄光を帰したり。**

「十分の一」というのは必ずしも悪い意味ではないけれども、この場合は「三分の一」ではなくて「十分の一」ですね。「地震」というのはいろいろな時に起きますが、特にキリストが十字架に架かった時にもの凄い地震――私は霊震と言いたいけれども――が起きた。

●勝利の声

14 **第二の禍害すぎ去れり、視よ、第三の禍害すみやかに来るなり。**

15 **第七の御使ラッパを吹きしに、天に数多の大いなる声ありて『この世の国は我らの主および其のキリストの国となれり。彼は世々限りなく王たらん』と言う。**

今度は勝利の声です。「この世の国」といっても、ヨハネが示されるところのものは、新天新地の方に向かっているわけですから、単に今の国が、今の現世がそうなるという意味ではない。「世々限りなく」という言い方はよく「永遠に」という意味に使われますが、過去・現在・未来――未来、「未だ来たらず」というより将来、「将に来たらんとす」といった方がいい――黙示録が取り扱っている内容は全部、将来にかかわる。だから、上から来ている

ところの大希望です。この大希望の音信がこの黙示録です。

仏教的な言葉に「三世」という言葉がある。ダンテの言う

「天国・煉獄・地獄」

という空間的なものですが、もう一つは

「前世・現世・来世」

という時間的なものです。我々はこの現在に現世において、前世や来世にみな関わりを持っている。過去と将来にみな関わりを持っている。こういう関わりを持っている自覚が本当の現在の自覚であり、現世の自覚であるわけです。ただ、問題は関わりの持ち方です、

「過去に失敗したから、どうのこうの」

なんて、そんな悔いているような持ち方ではなくて。

頼山陽（1780 ～ 1832）が雲華和尚に問答した。頼山陽は絵も少し書くようだな。孔子とお釈迦さんが相撲してどちらが強いかというわけで、孔子とお釈迦さんに相撲をさせて、お釈迦さんが負けている絵を書いた。そして、和尚さんを参らせようと思って、

「これに賛を付けてください」

と言った。そうしたら、雲華和尚は、

「孔子三世を知らず、釈迦抱腹絶倒せり」

と書いた。お釈迦さんがひっくり返っていて、孔子が立っている。ところが、和尚さんは

「孔子は三世のことが一つも分かってない。釈迦が孔子のことを腹を抱えて笑った」

と。やっつけられているのではなく、実は笑っているんだと。そういう非常に機知のある言葉がありました。

この三世です。孔子の教えは素晴らしいけれども宗教的ではない。お釈迦さんはもちろん、この三世を極めた人です。キリストはもちろんそうです。我々は現在において、過去を本当に、どんなマイナスの過去も全部逆にプラスに活かすだけのことができる。あらゆる体験をプラスに活かしてしまう。また、将来を現在において把握していく。

**「御国を来たらせ給え」**

というのは、現在に御国がなければ、本当に「御国を来たらせ給え」とは祈れない。だから、信仰の世界は、現在が一番大事なわけです。そういう意味の現在を生きているということは永遠を生きているということになる。単に時間の長さの永遠ではない。質的な意味です。だから、何歳で仆れたって差し支えない。ただ長生きすることがいいわけではない。

「一日一生」

とは内村先生が言いましたけれども、

「一日に於て一生を生きるような生き方をしろ」

ということです。「世々限りなく」とは、

「キリストの国というのは、現在が常に永遠的な現在である」

ということ。「世々限りなく」という意味をそういうようにとっていかなくては。ただ時間の延長みたいにとっていたのではダメだというわけです。そうすると、未完成の完成ということになる。どこで倒れてもいいんです、一日をそういった生き方をしていけば。

16 **かくて神の前にて座位に坐する二十四人の長老ひれふし神を拝して言う、**
17 **『今いまし昔います主たる全能の神よ、なんじの大いなる能力を執りて王と成り給いしことを感謝す。**

「今いまし昔います主たる全能の神」。これは新天新地を現実としている言葉ですから、ここに「後来たりたもう」という言葉がないでしょ。終末の世界が「今」になってしまっているから。「王」ということは、本当にすべてを恵みをもって治めることが「王」なんです、統治する者という意味です。「二十四」というのは完全数の「十二」の二倍です。

18 **諸国の民、怒りを懐けり、なんじの怒りも亦いたれり、死にたる者を審き、なんじの僕なる預言者および聖徒、また小なるも大いなるも汝の名を畏るる者に報賞をあたえ、地を亡ぼす者を亡ぼしたもう時いたれり』**

15～18節は素晴らしいですね。預言者、使徒たち、本当の信徒、これを大きくとらえて歌っているわけです。

19 **斯て天にある神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の櫃見え、数多の電光と声と雷霆と、また地震と大いなる雹ありき。**

計ってみたところが、やはりそういうのが本当の神殿であり、本当の教会である、ということなんです。なにも建物のことを言っているのではない。建物のひとつの神殿を譬えにして言っているので、これは

**「汝らは神の宮である、聖霊の宿るところの家である」**

とパウロが書翰の中で言っていますが、それと相応ずる内容になるわけです。形をもって言いながら、霊的な内容を語っていますから、そこを間違わないようにしてください。

## ●日を著たる女

今度は、黙示録12章にいきます。

1 **また天に大いなる徴見えたり、日を著たる女ありて其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕あり。**

「日を著たる女」というのは単数ですけれども、実はこれはエクレシア（教会）のことをやはり言っているわけです。天界の教会です。その足の下に月があり、頭には星がある。エクレシアは、黙示録では――羔羊の婚姻という言葉がありますが、キリストは羔羊で、羔羊が新郎ですから――新婦になるわけです。

2 **かれは孕りおりしが、子を産まんとして産の苦痛と悩みとのために叫べり。**

「子を産む」とは、エクレシアからクリスチャンが――この場合ももちろん内容的には複数

です――真のキリスト者がどんどん出てくるということ。それは決して簡単なことではないですから、悩み苦しむ。

3 **また天に他の徴見えたり。視よ、大いなる赤き龍(たつ)あり、これに七つの頭と十の角とありて頭には七つの冠冕(かんむり)あり。**

悪者だけれども、「七」の数が出ているのだから、これは非常に偽善的なんだ。「龍」はもちろんサタンです。中国では龍というのは霊獣のことで非常によいのだけれども。

4 **その尾は天の星の三分の一を引きて之を地に落とせり。龍は子を産まんとする女の前に立ち、産むを待ちて其の子を食い尽さんと構えたり。**

クリスチャンを迫害しようと思っていることです。

5 **女は男子を産めり、この子は鉄の杖をもて諸種の国人を治めん。かれは神の許に、その御座の下に挙げられたり。**

ここのところは、ちょっとメシヤ的な預言と相通じます。こういう暗号的な象徴的な言葉は決してただ一義的に解釈できないわけです。断定して「こうだ」ということがなかなか言えない。両義的、また多義的な場合もあるわけです。この場合は両義的な意味もあるでしょう。けれども、もうキリストは来ているのですから、これはキリストのことではない。だから、特別に選ばれた人のことを言うわけでしょう。

6 **女は荒野に逃げゆけり、**
「神はわれらの避所(さけどころ)なり」

という言葉がある。それと同じです。「避所」というのは卑怯なことではない。我々は神・キリストをわが避所とする。そうすると、そこで力を得るわけです。キリストは隠り身です。キリストですらそうなんだから。

**「私は何もできない。神さまがさせている。私は何も言えない。神さまが言わせている。私はちょっとも善くはない。なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものがあるか」**

と。だから、私はキリストのことを

「無者」

と言っている。いわんや、我々は自分を何者かと思ったら、とんでもないはなしだ。

**彼処に千二百六十日の間かれが養わるる為に神の備え給える所あり。**

「千二百六十日」がやはり三年半です。

**「我かれを誘いて荒野にみちびきいり終りにかれの心をなぐさめ」（ホセア2・14）**

というのがホセア書2章にありますが、あれを思い出せるようなところです。

●赤き龍

7 **斯て天に戦争(いくさ)おこれり、ミカエル及びその使(つかい)たち龍とたたかう。龍もその使たちも之と戦いしが、**

「ミカエル」は戦闘的な天使です。

「ミ（誰か）・カー（の如く）・エール（神）」

というのは

「誰か神の如くならんや」

という意味です。ヘブライ語の固有名詞にはみな意味がある。

8 **勝つこと能わず、天には、はや其の居る所なかりき。**

龍はとてもかなわない。ミカエルにやっつけられる。

9 **かの大いなる龍、すなわち悪魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる全世界をまどわす古き蛇は落とされ、地に落とされ、その使たちも共に落とされたり。**

「サターン」は「ディアボロス」とも言います。「ディアボロス」とは「間に投げ入れる者」という意味で、告訴したり中傷したりして人の間を裂く者です。「ミカエル」のことはダニエル書10章に出ています。「まどわす」という言葉は、「誘惑する者」ということで、やはりサタンのことをいう。ゼカリヤ書3章にも出ています。

10 **我また天に大いなる声ありて『われらの神の救いと能力と国と神のキリストの権威とは、今すでに来れり。我らの兄弟を訴え、夜昼われらの神の前に訴うるもの落とされたり。**

こういう、告訴する悪いやつ、「訴うるもの」とは現在分詞的な言い方をしていますから、いつでもそういうことをやっている、というわけです。

11 **而して兄弟たちは羔羊(こひつじ)の血と己が証の言とによりて勝ち、死に至るまで己が生命を惜しまざりき。**

これは素晴らしい言葉です。「羔羊の血」とは、贖いの血が、十字架が土台になっている。「己が証の言」は、言ばかりでなく、行為も含めて構いません。

12 **この故に天および天に住める者よ、よろこべ、地と海とは禍害(わざわい)なるかな、悪魔おのが時の暫時(しばし)なるを知り、大いなる憤恚(いきどおり)を懐(いだ)きて汝等のもとに下りたればなり』と云うを聞けり。**

素晴らしい勝利の歌ですね。

羔羊の血とまた自分の血でもって証をした人がたくさんある。宗教改革の先駆者、ジョン・ウィクリフ（英 1320 頃～ 1384）とヨハネス・フス（独 1369 頃～ 1415）とジロラーモ・サボナラローナ（伊 1451 ～ 1498）、この三人は典型的な先駆者たちでした。パウロの先駆者はステパノです。こういう名前は忘れないでください。ルターは16世紀の初めの方です。

13 **斯て龍はおのが地に落とされしを見て男子を生みし女を責めたりしが、**

14

**女は荒野なる己が処に飛ぶために大いなる鷲の両(ふた)つの翼を与えられたれば、其処にいたり、一年、二年、また半年のあいだ蛇のまえを離れて養われたり。**

これも「三年半」です。これは七年の半分です。「七年」というのは完全なんです。だから、その完全に至る半ばの意味です。

15**蛇はその口より水を川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたれど、**
16**地は女を助け、その口を開きて龍の口より吐きたる川を呑み尽くせり。**17**龍は女を怒りてその裔の残れるもの、即ち神の誡命(いましめ)を守り、イエスの証を有てる者に戦闘を挑まんとて出でゆき、**18**海辺の砂の上に立てり。**

しかし、まだどこまでも食い下がっているわけだな。

## ●海より上る獣

黙示録第13章にはいります。

1**我また一つの獣の海より上るを見たり。之に十の角と七つの頭あり、その角に十の冠冕(かんむり)あり、頭の上には神を瀆(けが)す名あり。**

どういう名だかは知りませんけれども。

2**わが見し獣は豹に似て、その足は熊のごとく、その口は獅子の口のごとし。龍は、これに己が能力と己が座位と大いなる権威とを与えたり。**

これは何を言おうとしているかというと、ダニエル書にも似たようなのが出てきます。ダニエル書では、バビロンとメデアとペルシヤが出てきて、バビロンはメデアとペルシヤに分離されるわけです。豹と熊と獅子というのはバビロンとメデアとペルシヤを暗示しているというわけです。非常に権力的なものです。

3**我その頭の一つ傷つけられて死ぬばかりなるを見しが、その死ぬべき傷いやされたれば、全地の者これを怪しみて獣に従えり。**

ヨハネがいた時にクリスチャンを迫害した悪いローマ皇帝はドミティアヌスという。その前はネロです。ネロとドミティアヌスが非常な悪王です。そういうのがみな暗号的に、昔のと対比して言われているわけです。

4**また龍おのが権威を獣に与えしによりて彼ら龍を拝し、且その獣を拝して言う『たれか此の獣に等しき者あらん、誰か之と戦うことを得ん』**

ルターは恐らくこの言葉を思い出して、『我らの神は堅き城なり』の讃美歌の中に入れたのだと思う。

「かの古昔(いにしえ)よりの悪しき仇敵(てき)」

というのはサタンのことです。私の著作集第七巻『聖書の人ルター』の中にその讃美歌の完璧な訳が載せてあります。

1　我らの神は堅き城なり。

攻防自在の武器なるぞ。
今や我らは苦難に遭えど、
神は一切の助けなり。
かの古昔よりの悪しき仇敵
今や真剣に抗い来たる。
大いなる権力多くの謀略は
その強悍しき武器にして
現世に彼の敵なし。

2
我らの力何をか為し得ん、
我ら忽ち失わるべし。
我らのために戦う義人あり、
神自らの撰びの人ぞ。
たずぬるか、かは誰と。
その人はイエス・キリスト、
万軍の主なる御神ぞ。
いかなるあだし神にも非ず。
戦の場はその聖手にあり。」（ルター『我らの神は堅き城なり』一、二節。私訳）

## ●羔羊の生命の書

5 **獣また大言と瀆言とを語る口を与えられ、四十二个月のあいだ働く権威を**
**与えらる、6 彼は口をひらきて神を瀆し、又その御名とその幕屋すなわち天**
**に住む者どもとを瀆し、7 また聖徒に戦闘を挑みて、之に勝つことを許され、**
**且もろもろの族・民・国語・国を掌どる権威を与えらる。8 凡て地に住む者**
**にて其の名を、屠られ給いし羔羊の生命の書に、世の創より記されざる者は、**
**これを拝せん。**

これはアンチ・キリストです。いかにその時にローマの皇帝が勢力をもっていたか、龍みたいなやつだというわけです。皇帝崇拝をしないと、やっつけられる。ところが、生命の書に記されたる者はもちろんそんなことはしない。戦いをする。殉教の死を遂げたりする。

9 **人もし耳あらば聴くべし。**

「耳ある者は聴くべし」とキリストがよく言われた。

10 **虜にせらるべき者は虜にせられん、剣にて殺す者は、おのれも剣にて殺さ**
**るべし、**

これはキリストのマタイ伝26章の言葉だ、

**「剣をとるものは剣で滅びる」**

と。

「竜虎共に争えば共に立たず」

という。ソ連とアメリカが戦ったら、もうお終いだというわけだ。預言書と黙示録は、我々は今読んで、非常に終末的な意味でビリビリ来る。剣で立つ者は剣で滅びる。栄枯盛衰、みなこれ剣で滅びた。人類の歴史はほとんど戦争史だ。戦いのない時はないですか。社会的には人殺しがたくさんあるし。

**聖徒たちの忍耐と信仰とは茲（ここ）にあり。**

これは非常に力強い言葉です。剣で起こる者は剣で倒れる。聖徒たちはそんなものは相手にしない。無抵抗、「忍耐と信仰」です。忍耐といいましても、耐え忍び待つこと、「忍待」です。「信仰」は、「信交」と書きたい。

11 **我また他の獣の地より上るを見たり。これに羔羊のごとき角二つありて龍のごとくに語り、**

これは三番目だな。

12 **先の獣の凡ての権威を彼の前にて行い、地と地に住む者とをして死ぬべき傷の医（いや）されたる先の獣を拝せしむ。**

妙なことが書いてある。みな、この龍から権威を与えられる。第一の獣は教会の外のやつをやっつけるし、第二の獣は教会の中をやっつけるし、第三の獣はこのようにして、「地と地に住む者とをして死ぬべき傷の医（いや）されたる先の獣を拝せしむ」という。

13 **また大いなる徴をおこない、人々の前にて火を天より地に降らせ、**14 **かの獣の前にて行うことを許されし徴をもて地に住む者どもを惑し、剣にうたれてなお生ける獣の像を造ることを地に住む者どもに命じたり。**

これはローマのカイザルのやっている事をみな比喩的にこういう妙な表現をしている。「獣の像」とはカイザルの像のことです。よく妙な銅像を立てるものな。

**●「六百六十六」**

15 **而してその獣の像に息を与えて物言わしめ、且その獣の像を拝せぬ者をことごとく殺さしむる事を許され、**

けれども、最後は大変なことになるぞと。この「許す」という言葉はよしとして許しているのではない。

16 **また凡ての人をして、大小・貧富・自主・奴隷の別（わかち）なく、或はその右の手、あるいは其の額に徽章（しるし）を受けしむ。**

これはアンチ・キリストの印だな。白きサタンだ。

17 **この徽章を有たぬ凡ての者に売買することを得ざらしめたり。**

だから、持たない者はみな苦しめられる。

**その徽章（しるし）は獣の名、もしくは其の名の数字なり。18智慧は茲（ここ）にあり、心ある者は獣の数字を算（かぞ）えよ。獣の数字は人の数字にして、その数字は六百六十六なり。**

そういう印のない者はみな迫害されてしまって、印の在るやつがいいと。こんな印を持っていたら大変だ。「666」というのは、ヘブライ語でこういう字なんです。ヘブライ語のアルファベットには数値がある。それで、「ヌーン」という字は50を表す。「レイシュ」というのは200です。「ワウ」は6。「エヌ」は50。「コフ」は100。「サメク」は60。「レイシュ」は200。これで合わせると「666」になる。この字は何かというと

「ネローン・カサール」「皇帝ネロ」

のことです。皇帝ネロが「龍」なんです。ネロは悪いやつで非常にクリスチャンを迫害した。だから、「ネローン・カサール」というヘブライ語の暗号で、皇帝を崇拝するやつはこの「666」が書かれるわけだ。そういうのが龍の味方なんだ。そして手先となって、キリストを、神を信ずる者を迫害していた。そういう歴史的な内容をこういう暗号みたいな言い方で言っているわけです。まだ、決定的な戦いにはいきませんよ。次のハルマゲドンの戦いが最後になります。

我々は、しかし、今こんな平和なような現実にいますけれども、いつ何が起きるかわからん。サタン的な勢力が今、跋扈していますから。剣で戦って核戦争がいつ起きるかわからないというような危機的な情況です。我々は本当に黙示録的な現実を一面において持っている。

## ●火も亦涼し

16世紀末の甲州の恵林寺の禅僧、快川（かいせん）和尚が焼死する際に唱えた有名な言葉がある。信長の軍が攻めてきて、坊さんたちはみな恵林寺の中に隠れ込んだ。しかし、それは間者によって信長に分かったものだから、これに火を放てということで火が放たれる。その時に、

「安全は必ずしも山水を用いず。心頭を滅却すれば火も亦涼し」

という有名な言葉がある。禅の世界で本当にそのような境地になって、焼かれながらなお涼しいというような快川和尚です。

私たちは平素から本当に、どのような艱難にでっくわしてもへコたれないということ。それはやはり、信仰を試される必要がある。自ら試されることはないけれども。その時に、「ああこれは……」というような嘆声を発しない。人に何と言われようと、どう取り扱われようと、どんな逆境に遇おうとも、逆に力がくる。断食しなければならない時は、キリストを食えばいい、キリストを飲めばいい。

要するに、これは禅宗の世界では悟りの世界で、「火もまた涼し」という境地に入った。それは素晴らしいことですけれども、我々はこのキリストという驚くべき、火そのもののような、また水そのもののような、光そのもののような、そういった実在の中に自分を本

当に投げ入れれば、必ずその艱難に勝つ。そして、ヘコたれないどころでない、逆に力が出てくる。これが本当の信の世界です。信仰は、聖書をただ読むだけではない、聖書を自ら生きなくてはいかんわけです。食ったら、生きなくてはいかん。

「食ったら苦い」

というのはそのことです。ところが、この苦さで、「ああ、苦い」では困る。この苦さがまた逆に甘さに変わるくらいの力がそこに出てくるところの、苦さをもまた変化させるようなのが本当にキリストを生きるということです。

パウロがそれをやった。コリント後書11章に、

**[23]彼らキリストの役者なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝れり。わが労は更におおく、獄に入れられしこと更に多く、鞭うたれしこと更に夥だしく、死に瀕みたりしこと屢次なりき。[24]ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、[25]笞にて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、破船に遭いしこと三度にして一昼夜、海にありき。[26]しばしば旅行して河の難、盗賊の難、同族の難、**

「同族」というのはユダヤ人です、迫害されたから。

**異邦人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、偽兄弟の難にあい、**

同じクリスチャンかと思ったら、とんでもないと。

**[27]労し、苦しみ、しばしば眠らず、飢え渇き、しばしば断食し、凍え、裸なりき。[28]ここに挙げざることもあるに、なお日々われに迫る諸教会の心労あり。[29]誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。[30]もし誇るべくば、我が弱き所につきて誇らん。[31]永遠に讃むべき者、すなわち主イエスの神また父は、我が偽らざるを知り給う。」（コリント後11・23～31）**

「汝知りたもう」という、詩篇139篇です。これは深い愛をもって知ってくださる。人間はお互いに何のかんのと言っているけれども、そんな世界ではないぞということです。艱難にあったら、パウロ以上はないでしょう。それだけ驚くべき艱難にあいながら、それを突破していった。「心頭滅却すれば火も亦涼し」以上の力をパウロは与えられていった。それはキリストの力、聖霊の力です。キリストとパウロは本当に、ヨハネもペテロもみな、一如の世界にいた。一つということです。

「我が汝か、汝が我か」

という世界です。信仰というのは、そういう現実に入ったら、何が起きてもいいです。最後には、一人になったって一向差し支えない…（異言）…。そういう、もの凄い事態です。今のキリスト教の世界が非常に観念に頽落してしまった。我々は、パウロ、ヨハネ、ペテロ、使徒たちのこの次元に戻らずんばやまず、ということです。